

在日朝鮮人文学研究

―「語る資格」をめぐる―

康
潤伊

【博士論文概要書】

「在日朝鮮人文学研究―「語る資格」をめぐって―」

康 潤伊

本博士論文は、在日朝鮮人文学とその研究において、等閑視あるいは不可視化されてきた作家や主題を論じること、在日朝鮮人文学の枠組みを照射し、その成立基盤を問い直すものである。

本博士論文では、一九九〇年代後半から現在に至るまでの小説を論じる。この時代を選択したのは、すでに在日朝鮮人文学がひとつのジャンルとして認知されたその後、作家たちが当該分野と交渉した過程を跡づけていくためである。交渉過程が重要な所以は、在日朝鮮人文学が現在直面している二つの隘路にある。この二つの隘路とは、何をもって在日朝鮮人文学とするか、そして、在日朝鮮人文学は終焉したか否かという問いである。ただし本博士論文は、これらの問いに答えを出すことを企図しているわけではないことはあらかじめことわっておきたい。

二つの問いが噴出した契機は、二〇〇六年に勉強出版から出版された『(在日)文学全集』(黒古一夫・磯貝治良編)への収録を、金城一紀と柳美里が断ったことであつた。もともと金城や柳は、先行する在日朝鮮人文学の担い手たちとは一線を画する「新しい」作家とみなされており、そのため既存の在日朝鮮人文学にはあてはまらない作家とされてきた。その二人が断ったことにより、在日朝鮮人文学の定義や終焉をめぐって議論が巻き起こつたのである。

こうした問いが生起した背景には、在日朝鮮人文学が内面化してきた血統主義や国籍主義、そしてそれに依拠した世代論がある。世代論とは、一世から三世へ移行していくほど、民族への帰属意識が薄らいでいくという見立てである。この見立ては単純すぎるばかりでなく、血統主義とパラレルになっているのだが、血統や国籍と癒着した世代論は、これまで在日朝鮮人文学において強い効力を持ってきた。

こうした問題点は、二〇一四年に宋恵媛によって批判され、超克される気配をみせた(『在日朝鮮人文学史』のために―声なき声のポリフォニー―岩波書店)。在日朝鮮人文学をその起源から問い直す宋の研究はしかし、終焉論や「新しい」作家たちの文学的営為については何ら有効性を持たなかったといわねばならない。一九四五年の「解放」から在日朝鮮人文学の「本源」を追っていき、金達寿を筆頭とした男性知識人より先行する文学の担い手として、名もなき人々のエクリチュールを位置づけるという宋の研究の立場からすれば、終焉論や比較的新しい作家たちに興味が薄いのは当然のことでもあるが、もう一点、宋の研究には看過できない問題点がある。

宋は、世代論や、日本語テキストのみが分析対象とされてきたこと、そして在日朝鮮人文学の起点として金達寿を位置づける先行論などを批判した。いわば、これまで在日朝鮮人文学の中心とされてきたポイントを軒並み論破したといえるが、その後には宋は、新たな中心つまり「本源」として、市井の人々のエクリチュールを位置づけてしまう。このとき、宋が批判したはずの中心／周縁の構図は逆転したかたちで再生産されているのではないか。そしてそれは、中心をすげかえながら作家やテキストを無限に序列化し続けることを意味するのではないか。

本博士論文ではこうした問題意識にたつたうえで、朝鮮学校を描いた文学、そして鷺沢萌と柳美里を研究対象とした。これらは、既存の在日朝鮮人文学の領域からはほとんど等閑視されてきた、あるいは「該当しない」かもししくは「正統」ではないと評価されてきた。

朝鮮学校を描いた文学はこれまで、不思議なほどに、朝鮮学校を描いているという点に注目されてこ

なかった。だが、金城一紀『GO』（講談社、二〇〇〇）は、既存の在日朝鮮人文学との差異化が明確に企図されていた小説であった。新たな領域として発見された朝鮮学校文学は、崔実『ジニのパズル』（講談社、二〇一六）、ヤン ヨンヒ『朝鮮大学校物語』（KADOKAWA、二〇一八）と続いていくが、これらの創設は、青春小説としての評価が先行し、朝鮮学校を描いた文学であるという点に着目した論考はいまだ非常に少ない。

鷺沢萌は、クォーターであることや日本国籍であること、そしてその作風の明るさから、在日朝鮮人文学の「正統」とはかけ離れた作家とみなされており、柳美里もまた、民族を志向せず「祖国」を背負わない作家と位置づけられてきた。

このように、本博士論文で扱う三つの対象は、既存の在日朝鮮人文学の枠組みから逸脱しており、であるがゆえに、本博士論文の試みを達成するために有効な考察対象である。在日朝鮮人文学が周縁化してきた対象を論じること、当該分野の枠組みがもはや有効でないことを裏づけつつ、彼・彼女たちが在日朝鮮人文学という枠組みと交渉してきた過程が析出できるだろう。「正統」におさまることのできる作家は、そもそも交渉を必要としないのだ。

これらの三つの対象は、主題（朝鮮学校を描いた文学）と作家（鷺沢萌と柳美里）と二つのレベルに分かれているが、異なるレベルを統括するのは、「語る資格」という視座である。この「資格」という視座は、これまで述べてきた国籍や血統や政治性をはじめ、既存の在日朝鮮人文学において主要な評価軸となってきた種々のファクターから距離を取るために選定した。

本博士論文で扱う作家たちが語るとき、そこには当事者性が生起する。だがそのとき、先行する在日朝鮮人文学との異同が問われることになり、したがって当事者性は時にゆらぎ時に強固になる。問われたとき、彼・彼女たちはどのように応答したのか。本博士論文ではこの点を検討した結果、「語る資格」を存分に行使したもの、迂回したもの、読み替えたもの、逆手にとったものが見出された。

第一部では、朝鮮学校を舞台にした小説を扱った。朝鮮学校は、日本社会においてブラックボックス化されてきており、在日朝鮮人の間でもその内実を知る者は決して多くない。その結果として、「語る資格」はほとんど卒業生に限定されてきた。第一部で扱う小説の作者たちも、朝鮮学校の卒業生である。「語る資格」が特殊であるがゆえに最も明瞭である。

第二章で論じたヤン ヨンヒ『朝鮮大学校物語』（KADOKAWA、二〇一八・三）は、「語る資格」を無邪気かつ存分に行使した小説である。この小説において朝鮮学校は一方的に表象されている。つまり、作者であるヤンが投影された主人公が、特別なサヴァイヴァーとして作中で際立つように、朝鮮学校は利用されているのである。そこでは朝鮮学校は、主人公を抑圧する場である。この点において『朝鮮大学校物語』は朝鮮学校に対する排外主義と表裏一体になってしまっている。

だが、この小説の目論見は、あくまで主人公・ミヨンの特権化である。その過剰な欲望が、排外主義との結託を相対化しうる端緒にもなっている。ミヨンを朝鮮学校の他の学生と差異化するポイントは、映画や演劇を愛好することだが、それは恋人である黒木との関係においては共通点にすぎない。ミヨンの芸術好きという差異は、黒木との間では機能しないのである。二人の間においてミヨンを特権化するポイントは、朝鮮学校生であることだ。そのためミヨンは、黒木との関係においては朝鮮学校に依存し、みずからの差異を守ろうとする。ここでは、朝鮮学校はミヨンを抑圧する場ではなく、ミヨンの差異を保証してくれる場となっている。概して『朝鮮大学校物語』は、「語る資格」を行使するときのインパクトに無自覚なまま、差異化への欲望が先行した結果、「語る資格」の横暴さをあばくものとなっていると

いえる。

では、どのような語り方なら、排外主義やヘイトスピーチと離れた地平で朝鮮学校を語ることができ
るのか。それを第三章で、金城一紀『GO』から論じた。『GO』の語り手であり主人公である杉原は、
日本社会が在日朝鮮人にあてはめる優劣の論理に対抗しようとする。この優劣の序列は、遺伝子学に基
づいて形成されているのだが、杉原がそこで持ち出すのは、知的・肉体的な強さであり、優位に立つ者
たちをその弱さにおいてあわれみ許容することであった。すなわち、優劣の序列に強弱の論理で対抗し
ていくのである。

この強弱の論理を構築する基盤となっているのが、朝鮮学校であった。だが、強弱の論理による「勝
利」は、あくまで個において達成されるものである。作者と杉原は、おそらくそれにすら自覚的であり、
その点において、朝鮮学校を「語る資格」については懐疑的かつ冷笑的であるといえる。杉原が朝鮮学
校で獲得した強さを個の領域にとどめ、国境線や国籍、民族といったすべてのものに超越的な態度を取
っていくのは、こうした点と関連しているといえよう。つまり、みずからの持っている「語る資格」の
特権性に自覚的であるがゆえに、その特権性から距離を取ったのである。

だが、朝鮮学校を「語る資格」を持つ者の立ち位置は、『GO』が発表された二〇〇〇年以降、一変し
た。ヘイトスピーチやヘイトクライムである。第四章で扱った崔実『ジニのパズル』は、こうした現状
をふまえたうえで「語る資格」を全方向的に拡大させた小説である。朝鮮学校を語った時点で生起して
しまう特権性を避けるために、ジニがとった戦略は二つある。一つ目には、語りを攪乱し、特定のメッ
セージ性を発生させない方法で語ることであり、二つ目には、作中のジニが行う「ゲーム」を、語り手
としてのジニが小説の構造にもしかけることで、あらゆる読者を「ゲーム」に参加させる方法である。『ジ
ニのパズル』では、何重にも客体化されてきた朝鮮学校の女子学生の記号性から脱し、さらに特権的か
つエゴイステイックに朝鮮学校を表象することとは違う地平で、「語る資格」を再獲得されているといえ
る。

第二部では、鷺沢萌を論じた。鷺沢は「在日作家か否か」程度の言及しかされてこなかったのだが、
そこには、一九歳でデビューし「天才美少女作家」としてもはやされた彼女が、なぜ「社会問題」、す
なわち在日朝鮮人問題に接近していくのかといった疑問があったと考えられる。彼女は、そうした視線、
特に「在日作家である／ではない」という視線に敏感だった。その意味で、作家たちが「語る資格」に
向き合いそれを行使する様相を考察する際に、最も適した作家である。

鷺沢が周囲からの視線に最もゆれているのは、第六章で扱った『ケナリも花、サクラも花』（新潮社、
一九九四・二）である。こうしたゆらぎは、先行論においてはアイデンティティの本質主義と構築主義
の間での葛藤だと意味づけられてきたが、「語る資格」と、それを見定めようとする読者の存在をふまえ
てみると、みずからの作家イメージとの交渉の過程であることがわかる。在日朝鮮人の「新しい世代」
としての自負が語られようとした途端、それは打ち消され、「流行」の「美人作家」に注がれるような期
待の視線に馴致させられていってしまう。鷺沢において読者とは、書く瞬間に生起する存在であり、し
たがって彼女の語りをゆらがせる存在なのである。

だが、読者への応答のかたちは、変遷していく。これを論じたのが第七章である。ここで注目すべき
なのは、応答のかたちを変えつつも、決して彼女が語ることをやめなかったことである。語り続ける拠
り所となっていたのは、朝鮮半島出身の祖母であった。

その祖母から、『ケナリも花、サクラも花』発表以降、もう自分のことは語らなくてと遺言されて

しまったことが、『私の話』（河出書房新社、二〇〇二・一一）で明かされる。付言しておく、鷺沢が祖母を抛り所としている点は、『ケナリも花、サクラも花』の先行論において本質主義として批判されてきたのであるが、それは取りも直さず周囲から本質主義的・血統主義的な視線から当事者性を疑われてきたことの傍証であろう。

「語る資格」の抛り所である祖母に語ることを禁じられてしまった鷺沢は、「民族」「家族」をフィクションであるにとらえたうえでお、それらを語る自由を獲得していく。それは、みずからどのような構築していけるものとしての自由であり、読者の期待に振り回されてきた鷺沢の、いわば開き直りといってもよいだろう。

第八章で取り上げた遺稿集『ビューティフル・ネーム』（新潮社、二〇〇四・五）では、その開き直りがさらに進展していく。つまり、ひとり語りの小説において理想的な聞き手を仮構するという試みである。『ビューティフル・ネーム』では主に、在日朝鮮人の「本名」／通名の問題に焦点が当てられているのだが、ここからは、他者に承認されるべき（と『ケナリも花、サクラも花』で語られる）「私は在日か否か」という問題から、「誰にどう名乗るか」という問題へ移行していったことが読み取れる。

『ビューティフル・ネーム』における名乗りは、アイデンティティや国との距離感によってではなく、あくまで個と個の間の、時に偶発的で間接的な影響関係によって決定されるものである。こうした個への焦点化は、在日朝鮮人が名乗るときに厳然たる現実として立ちはだかる差別を軽視してしまう危険性もあるが、短編集『ビューティフル・ネーム』を構成するはずだった最後の未完の小説「ぴよんきち／チン子」によって、その危険は回避されるはずだったととらえたい。「語る資格」をめぐる最も葛藤した作家は、「語る資格」をみずから仮構し付与しうるものとして読み替え、その軌跡を未完のままにすることで可能性を開き続けたのである。

第三部で扱った柳美里は、在日朝鮮人文学の新たな旗手と目されていたが、先述した通り、民族を志向しない作家とされ、終焉論を呼び込む契機のひとつとなった。だが、植民地支配期にマラソンランナーとして生きた祖父をモデルにした『8月の果て』（新潮社、二〇〇四・八）によって、在日朝鮮人の問題に向き合ったと評価されている。『8月の果て』は、柳美里のターニングポイントに位置づけられているのだが、まずはこの前提を再検討する。なぜなら、『8月の果て』を転換点とすることは、家族を描いた初期の私小説との連続性が前提となっているのだが、この「家族から民族へ」というラインとは違ったところに、柳は民族表象を託したと考えられるからだ。

柳美里は、とかく自己演出に長けた作家である。彼女は、在日朝鮮人文学から期待を向けられながらも、枠組みへの包摂を拒むことでその期待を折ってきたといえるが、こうした点に柳美里の、作家イメージおよび「語る資格」の利用過程をみることができる。

柳美里といえば、家族を描く作家というイメージを持っているといってもさして異論は出ないだろうが、柳はこうしたイメージに沿いつつも、家族を内破していく、もう一人の〈私〉である〈少女〉を小説に登場させている。第一〇章では主に初期作品から、その少女の系譜をたどった『フルハウス』『Green Bench』そして『ゴールドラッシュ』という三つの小説は、広い意味で家族を描いた小説だが、これらを〈少女〉という視座から追ってみれば、彼女たちは徐々に家族を侵食し、登場人物たちが寄せる家族への希求を挫折させていく存在であることが明らかにになる。その挫折は、『ゴールドラッシュ』の主人公である少年が抱く家族像を完全に違うものへと変化させてしまう少女・響子において決定的になる。

そのため第一章では、『ゴールドラッシュ』を取り上げた。〈少女〉によって家族が読み替えられて

しまった『ゴールドラッシュ』においては、先行論で見出されてきた「家族から民族へ」というラインはもはや有効ではない。では、その「民族」はどのように表象されているのかといえ、意図的な空白としてである。これは、常に「日本人か韓国人か」という二者択一から逃れようとしてきた柳美里が仕掛けたガミックととらえることができるだろう。

柳美里における〈少女〉の系譜は、『8月の果て』においては、「慰安婦」の少女・金英姫と、朝鮮民話の代表的存在である阿娘に連なっている。第二章では阿娘に着目した。阿娘は、民族の集合的記憶であり、かつシャーマニズム、すなわち心霊の世界と密接に関連した〈恨〉を託されている存在として、とりあえずはみなすことができる。だが、小説の前半では、超越的な魂あるいは霊のレベルにいた彼女が、後半に至って一登場人物のレベルに下降していくことで、〈恨〉はその意味を変化させていく。阿娘は登場人物として同じ登場人物の悲劇を目撃し、その無力さの嘆きを読者に目撃させる。阿娘を媒介することによって〈恨〉は、集合的記憶ではなく、個別具体的な目撃証言によって刻まれる記憶の象徴となっていくのである。柳美里は『8月の果て』以前から、巫女的な性質や〈恨〉との親和性が論じられてきた。そうした評価を逆手に取って、民族の象徴である〈恨〉を読み替えたのである。

もう一点、『8月の果て』から論じなければならないのは、家族の問題であり、家族と〈少女〉の関係である。これを、第一章で、「慰安婦」の少女・金英姫を中心に、創氏改名と家の問題から論じた。英姫は、長大な一族の物語としての『8月の果て』の外部に在る存在であるが、それゆえに、「慰安婦」の女性たちが、帰る場所としての家を喪失してしまったことを描き出した。ここに、家族と民族という図式が持つジェンダーや家の抑圧が明らかになる。『8月の果て』では、「慰安婦」という、これもまた集合的記憶といつてよいだろう存在を描くことで、むしろ集合的記憶に潜在しているジェンダーを暴き、彼女たちの弔いはいかにして可能かを問うているといえる。

誤解を恐れずにいえば、在日朝鮮人文学からの期待を遂行してこなかった女性作家が、植民地支配期の朝鮮を舞台にした小説を書き、そこに「慰安婦」の少女を登場させるといえるのは、あまりにできすぎた、インシエーションである。「とうとう柳美里が民族を書いた」という読者や評者らの期待を満たすようでありながら、その期待が等閑視している問題を突きつけていく、そうした実践が『8月の果て』では行われているのだ。

なお、第三部には補論として、柳美里の戯曲『Green Bench』に出演した李礼仙が、どのように自己イメージを読み替えていったかを論じた。李礼仙は、唐十郎率いる劇団「状況劇場」のアンダーグラウンド性を前提にしつつ、そこに出自も加わることで「反近代」性を見出されていた。

李礼仙は、柳美里の『Green Bench』では母を演じているのだが、彼女は、自己演出とは違った意味が付与されそうになった途端、付与しようとする者を殺害する。そして、自己演出のモチーフである娘をみずからの胎内に取り込むことで、彼女の自己演出は完成する。李自身の出自についての考え方は棄却されたまま、在日朝鮮人であるという一点において、社会に対抗的な意味を付与されていた李礼仙の身体は、『Green Bench』においてみずから意味づける身体へと変化したのである。補論においては、柳美里のテキストが潜在的に持っているイメージを読み替えうる可能性、あるいはイメージを逆手に取った自己演出を可能にする基盤をより跡づけることができた。

結論では、本博士論文の課題を述べつつ、展望として、「語る資格」を「非文学」とされたテキストにも当てはめうる可能性を述べた。やや雑駁にくるかたちにはなるが、総じて在日朝鮮人文学研究は、日本近代文学の影響を強く受けている。例えば、「近代文学」として未成熟な「記録や手記と、金石範をは

じめとした「本格的」な「全体小説」といった対置である。そもそも世代論自体、共同体験をもとにした戦後文学の世代区分を彷彿とさせる。一方で「語る資格」という視座を用いて論じるときに要請されるのはテクストが想定していると推測される、先行する言説である。それは書き手の世代や出自はもろんのこと、文学か否かといった区分ではない。在日朝鮮人の読み書く営みを、文学／非文学という区分ではなく、当事者性との交渉過程としての表現史としてとらえなおす可能性を、「語る資格」という視座は持っているといえよう。